

左に三回転する習俗について

鳥 越 皓 之

一、棺桶を左に三回まわすこと

わたしたちが自分の生活をふりかえってみると、どうしてもこのような行為をしているのか自分では解らないけれども、昔から父祖が行なってきたので、自分も真似をして行なっているというような行為が意外と多いものである。そのような行為の一つに、あるものを左に三回まわす習俗がある。

たとえば、棺桶を左に三回まわす習俗がわが国に広くみられる。かつては土葬であったので、墓場の広場で棺桶をぐる／＼まわしたものである。近頃は焼場で棺桶をまわし

ている姿をみかける。どうしてもこのようなことをするのであろうか。調査に行つたときなどに、地元の人に説明を求めた場合、普通もどつてくる答は次のようなものである。つまり、棺桶をぐる／＼まわすと、仏さん（死者）は目をまわしてしまふ。それで、この世にもどつてくる道が解らなくなり成仏するのであると。

この答は一見もつともなうである。けれども、十分に説得的とは言えない。たんに目をまわすことが目的であるならば、まわす方向、回数を決めておく必要がないからである。わが国に限らず、多くの民族では「左」というのは「常でない」という意味をもっている。また「三」という数字はわが国では「聖数」である。それゆえ「左に三回」とはそこにある特別な意味が込められているとみなしてま

ちがない。

特別な意味とは何であろうか。これはすでに、それを行なっている当人たち自身さえも知らないことである。棺桶以外にも左に三回まわす習俗は他にもいくつがある。たとえば、大阪府泉南郡では、牛の売却など牛にとつて特別な日に、飼主が牛を神社につれていって、本殿のまわりを左に三回まわらせていた。これも、どうしてなのかという理由が解らない。このように、この習俗は疑問を解く鍵がいまま、未解決の問題として残されてきた。

ところが、ふとしたきっかけから、この疑問を解く鍵がみつかった。このきっかけに至るまでの過程について、次に述べよう。この過程をみていくことを通じて、さらに、習俗、文化そのものについて、共に想いをめぐらしてみたい。

二、南島文化と丸木舟

わが国の民俗学者や人類学者は、かなりはやい時期から、わが国の南西諸島の文化に関心を払ってきた。それには、

様々な理由があるが、第一義的には、この地域が南からの先史・古代文化の流入路と考えたからであった。われわれ日本人の先祖は黒潮に乗って、この国にやって来たのではないかと考えたわけである。今日では、日本人の先祖のわが国への流入径路、また文化の流入径路については、南方説だけではなくいくつかの説があり、これらの仮説も順次洗練されてきている。けれども、依然として、南方説も有力な仮説として残っている。それが、様々な専門の研究者の目を南西諸島に向けさせる原因の一つとなっている。

この地域の一部では、現在でも、まだ丸木舟（刳舟）が使用されている。わが国の丸木舟の最古のものは、千葉県加茂遺跡出土の縄文前期の丸木舟である。丸木舟はこの時期以降、弥生・古墳時代はもちろんのこと、ほぼ江戸時代ぐらいまで、かなり多くの地域で使用されてきた。丸木舟の分布は、ほぼ全国的といえるが、昭和期に入っても使用していた地域となると、たいへん限定される。この数少ない地域の一つが南西諸島の丸木舟なのである。

とりわけ、人間と文化の流入径路に関心をもつならば、それらの運搬用具としての丸木舟には、とくに関心がもたれることになる。この南西諸島の一部の奄美大島に近いトカラ列島で、昨年、おそらく最後の製作になるであろう丸

木舟が二艘つくられた。その製作過程の記録をとっておくことは、たいへん重要なことであるので、筆者などで記録班をつくり、その全過程を記録して残すことに成功した。

(岩波映画「最後の丸木舟」筆者監修)

その全過程をここで紹介する余裕はもたないが、このうち本論に関わる部分をとりあげて、最初にあげた疑問が解けていった道筋を明らかにしたい。

三、擬人化されている丸木舟

製作過程を注意深く観察すると、丸木舟が擬人化されているのがわかる。一例をあげよう。山でおおよその割りぬきの作業が終わると、「荒グリ」をした丸木舟を里に降ろす。里に降ろしてから、里で細かな仕上げ作業をするのである。丸木舟を山から里へ降ろすこの作業を「山だし」と地元では呼んでいる。

ところが、丸木舟は単純に山から里に降ろされない。村(部落)の入口のところで、丸木舟を運んできた男たちと、村から食事をもって来た女たちが集まって共同飲食をする。

丸木舟を運んでいる途中で休憩して食事をとるといふか、こうである。

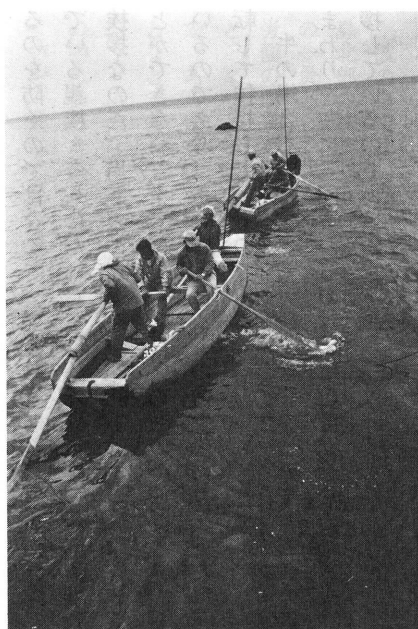
しかしこれは、たんに休憩して食事をとっているのではない。すでに気づかれている人もあるかもしれないが、これは「さかむかえ」の儀式である。この「さかむかえ」の儀式というものは、普通は神仏詣りなどで遠方に出かけた者を、むら境まで行つて出迎え、そこで共同飲食をする儀式をいう。これもわが国であまねくみられる儀式である。

けれども、丸木舟をむらに入れるのは、遠方を旅していた人を出迎えるのとは性格を異にする。しかしながら、さかむかえは必ずしも、神仏詣りのために遠方に旅していた人だけを迎えるのではなくて、他のむらからの嫁入りの場合もみられるから、その基本的発想は「むらに迎え入れる儀式」と考えてよからう。

すなわち、ここでむらに新たに入る丸木舟を迎え入れる儀式を行なっているのである。とするならば、人びとは丸木舟をたんなる物質とみなしているのではなくて、一個の「生あるもの」とみなしていると考えてよい。自分たちの生産・生活に身近かな物質を「生あるもの」とみなす発想は、決して珍らしいものではなく、世界の多くの民族にみられる発想である。

四、左に三回転する丸木舟

このように丸木舟が擬人化されている事実がわかる。次いで里で細かな作業を経て舟が完成する。舟が完成すると海に浮かべるのであるが、そのときに盛装した七才の女の子を一人舟に乗せる。「七才までは神の内」という古い諺がわが国にあるが、事実、この女の子は本来は神である。盛装とか化粧というのとはとくは神であるからしたので



左に三回まわる丸木舟

あり、いま言ったように七才という年齢も、この女の子が神とみなされていたことを示している。もっとも、すでに地元ではこの女の子が神であることは忘れられている。いつもそうするからという理由で、七才の女の子を盛装させて乗せているにすぎない。

なにはともあれ、この女の子を乗せて、丸木舟を海に浮かべるのであるから、これは丸木舟にとって大へん重要な儀式である。この舟着場が舟着場から、すこし沖に出て、やはり、ぐる／＼と左に三回まわったのだ。位置は丁度むらの宗社の沖あいになっている。

もちろん、わたしはすぐさま、棺桶をはじめ、左に三回転する事例をいくつか思い出した。そして、丸木舟が擬人化されているという事実がヒントになって、このながい間の疑問が氷解した。

どういうことかという、この丸木舟が左に三回、回転しているのは、ほかでもない丸木舟自身がむらの宗社に舟として完成した挨拶をしているのである。つまり、もの言えぬものたちが、挨拶する方法が、左に三回転することなのであると理解したのである。

そう理解すると、棺桶の問題も解決する。棺桶を左に三回まわすのは、死者の目をまわして、この世にもどってく

るのを防ぐのではなくて、死者のまわりに集まって悲しんでいる親族・友人にたいしての、死者自身の最後の別れの挨拶なのだ。当然のことながら、死者はすでに口をきくことができない。すでに、もの言えぬものの仲間入りをしているのである。それゆえに、もの言う代わりに、左に三回転して挨拶しているのである。

牛の場合も同様である。飼主が牛をつれて神社の本殿のまわりを左に三回まわるのは、牛自身がむらの神さまに挨拶しているのである。

五、日本民族のふるさと

もの言えぬものたちを、このような形式をとって挨拶をさせていたわが民族の先祖の心根とでもいえるものが、この事実から感じとれないであろうか。

さて、この事実についての、わたしたちは空想をふくらませていくことができる。左に三回転することがもの言えぬものの挨拶であるとなす発想は、変更が加えられにくい発想である。それゆえ、日本国内に止まらず、この行

為を行なっている地域を逆にたどっていくと、日本民族のふるさとにたどりつけるかもしれない。この行を行なっている地域は海上を南下してひろがっていくのか、あるいは中国大陸の方にのびていくのか、そのようなことを空想するのは楽しいことである。

すこしつけ加えておくならば、この発想はたいへん古い発想である。そのため、わが国のように、その行為の意味がすでに忘れられている地域があるかもしれないし、また、すでに行為はなく、「三回まわってワン」というような言いならわしとしてのみ残っている地域があるかもしれない。「三回まわってワン」という言いならわしの発生起源、意味の変化について、われわれは現在のところ充分な資料をもっていない。けれども、本来は三回まわることが一声に匹敵する意味ではなかつたらうかとわたしは推測している。いづれにしろ、このような事実は一人の力ではとうてい解明できないものである。さまざまな分野の研究者から、お教えを乞いたいものである。

(とりこえ ひろゆき 社会学部講師)